

目次

この『道中細見記』をお読みになる前に	2
増補三訂版 改訂にあたって	4
〈 序 説 〉 近世の旅と宝来講	5
1 宝来講の輪郭	6
「お伊勢参り」追体験 / 編成と運営 / 実験歴史学としての取り組み	
サポート隊かく奮戦す / 土木用語辞典 /	
旧道調査法概論 / 宝来講での経験から	
2 近世の旅と伊勢	22
近世の旅・伊勢参宮 / 伊勢への道 / 伊勢本街道	



この『道中細見記』をお読みになる前に

- ・この増補三訂版『道中細見記』は、第7回宝来伊勢講(1992)に際して製作した「平成壬申版」、その改訂版である「平成癸酉版」を基に、その後の変化について増補・改訂を加えたものです。
- ・ベースとしているのは、OBを中心とする宝来講の参加経験者が現在編集している『宝来講道中記(仮称)』です。これを参加者の皆さんに配布するために仮編集しました。編集中の『道中記』は、伊勢本街道と宝来講について、なるべく詳しく記録することを目的にしていますが、今回のような“逐年版編集版”では、レジュメとしての役割を重視していますので、関連情報についてはその多くを省略しています。
- ・しかし、編集の方針は大きく変わるわけではありません。基本的には ①伊勢本街道について、沿道の歴史・現況・景観などを把握し、旧街道自身の現状・歴史的変遷なども記録すること ②宝来講参加者にとって参考資料となるよう、過去の宝来講での経験を残しておくこと、の二つを目指しています。
- ・「記述の視点」をどこに置くかは大きな問題でしたが、“仮編集版”では宝来講の内部資料としての性格に重点を置きましたので、日程(季節・日割・時刻)、昼食・休憩・宿泊などの地点についての記述は、宝来講現行のものを基準としました。
また「宝来講」そのものを擬人化した視点を想定し、この「眼」によるよう考えてみました。細部の描写は、各部分の担当者、総括責任者、編集者の観察・考察によるものですが、情緒的な部分や経験に基づく記述は、過去の参加者の意見を吸収したうえで、「宝来講」が人格や感情を持っていれば、こう見えるのでは、という形で記述しています。「宝来講にもなじみ深い」などの記述は、こうした視点によるものと考えてください。初参加の人、参加回数浅い人にとっては違和感のある部分もあろうかと思いますが、この点をご諒解下さい。
- ・記述は、道筋そのものと、道から見える景観など、道や村に直接かかわる史料や伝承などまでを範囲としましたが、補足的な説明でも街道全体や近世の旅全体を説明する内容のものは本文に入れました。これ以外の補足的説明や、道筋を外れる名所についての記述、宝来講ならではのエピソードなどは、ミニコラムとして、本文の整理と、読んでおもしろい内容の両立をめざしています。

〈 道中編 〉 伊勢本街道 道中案内	33
1 日目 奈良市山陵町 (奈良大学) ~ 桜井市初瀬	34
2 日目 桜井市初瀬 ~ 宇陀郡御杖村	60
3 日目 宇陀郡御杖村 ~ 三重県飯南郡飯南町	84
4 日目 飯南郡飯南町 ~ 伊勢市吹上町 (伊勢市駅前)	108
5 日目 伊勢市吹上町 ~ 伊勢市宇治館町 (内宮)、(帰路 内宮~奈良大学)	128
巻末特別大付録 宝来講は楽し!	150
宝来講の夜 / 宝来講用語講座 / 道中人情話	
参考文献	158
編集後記	160



- ・沿道の状況や歴史的な事柄については、なるべく網羅的に取り上げるようにしています。しかし、読みやすさなども考えたうえ、他の刊行物に取り上げられているものは、それを参照することを前提にして、その内容を詳述していない部分もあります。
- ・第1回(1986)以来のルートを変更した部分、今回この道中記を編集するための調査で新たに確認された旧道などは、その旨を明記して「宝来講のルート資料」としての性格を強く持たせました。
- ・奈良から伊勢へ向けて歩くイメージや、詳細図の方向感覚との違和感がないよう、日本史関係の出版物としては特殊な横書きを本文に採用しました。この結果、道標碑文などの史料を紹介する場合には表現の制約を受けることになりましたが、追って資料編を刊行し不足の点を補う予定です。
- ・旧街道のルートが二つ以上考えられる場合は、その両方を示して、断定的な記述を避けました。
- ・交差点の形態を表現するについては、読んで形状の差がわかるよう考えました。直交するものは「十字路」「丁字路」のように表記、その他は「Y字」「三叉」「四叉」「五叉」などのように区分しています。「十字路」と「四叉路」、「丁字路」と「三叉路」は、それぞれ別のものでお読み下さい。単に「交差点」と表記するときは、原則として信号のあるような規模のものとし、「分岐」と「合流」についても、伊勢へ向けて歩いた場合を基準にしています。
- ・文中で表示した距離は、目標物を見つけるための目安としてあげたものです。歩測・目測による概算距離と考えてください。おおむね、100m未満の場合の有効数字は約10m単位、100m以上の場合は約50m単位、500m以上の場合は約100m単位に、それぞれ概算して表示しています。
- ・年号については、道標や史料の紹介の便を考え「元号(西暦)」で表記しました。
 なお「(宝来講)第〇回」という表現のある部分には、()内に西暦を付しています。元号のひとつつという扱いです。いわば「私年号」のようなもの、と考えていただければよいのではないかと思います。
- ・各県の教育委員会が刊行している歴史の道調査報告書を文中で出典として示す場合は、正式書名を用いずすべて『歴史の道調査報告書』としました。正式書名は巻末の参考文献を参照下さい。
- ・参加者には地図をお渡しするのが前提ですので、この『道中記』には一部の詳細図を除いて地図を掲載していません。お手もとの地図と併せてお読みください。